

研究会記録

チッソ労働運動史研究の経過と課題
研究会記録の公開に寄せて

熊本学園大学社会福祉学部教授・水俣学研究センター長 花 田 昌 宣

熊本学園大学水俣学研究センター研究助手 井 上 ゆかり

はじめに

水俣学研究センターでは、2006（平成18）年10月にチッソ労働運動史研究会を立ち上げ、新日本窒素労働組合（以下、新日窒労組）の資料整理に取り組むと同時に、日窒、新日窒そしてチッソと社名を変更してきたチッソ株式会社の労働運動史の記録に取り組んできた。当初、組合労働者のヒアリングをベースにした討論研究会として始めたのだが、その研究会自身が労働者にとっての自らの歩みの発見の場となり、また貴重な記録（オーラルヒストリー）採録の場となった。『水俣学研究』創刊号では、安定賃金争議の労働委員会斡旋をめぐる中心的な役割を果たした荒木誠之氏を迎えて行った第14回研究会の記録を収録したが、本号では、その第1回の研究会記録を収録する。

なお、この研究会を立ち上げるに至った経過と課題について整理することを通してこの研究会の意味を明確にし、研究会記録の解題としたい。

研究会開始に至る経過

2005（平成17）年に立ち上がった熊本学園大学水俣学研究センターは、同年8月水俣市内に水俣学現地研究センターを開設した。ここに至る大きな契機¹⁾の一つは、新日窒労組の組合資料を受け入れ、整理し公開利用可能にして行くという大学の研究者側の意図と資料を残したいという元組合員たちの意思であった。その経緯については『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』の解題²⁾および資料展図録解説³⁾に簡単に記した。また、この新日窒労組旧蔵資料の整理公開は、2005年度より水俣学研究センターが受けた研究助成「私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター事業」の第三プロジェクト「水俣学関連資料の収集および解題のデータベース化による世界的発信」に位置づけられた。

- 1) 現地研究センターの開設の意図としては、もちろん、現地に学び現地に還元するという水俣学本来のねらいがベースにある。学内的な経緯については水俣学形成史という観点からいざれ明らかにしたいと考えている。
- 2) 『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』熊本学園大学水俣学研究センター、2009年3月
- 3) 花田昌宣「新日窒労組の闘争と水俣学研究資料の意味」『新日本窒素労働組合60年の軌跡』熊本学園大学水俣学研究センター、2009年、pp. 3-10

それらを受けて、2006（平成18）年秋より、チッソ労働運動史研究会が立ち上げられたのである。本号に収録したものは、その第1回研究会の発言録である。これまで14回にわたる研究会を開催しており、会の記録自体が貴重な内容を有しているので今後掲載していく予定であるが、それに当たって、この研究会の趣旨と経過を記述しておきたい。

新日窒労組解散および資料の保存方法が話題に上った2003（平成15）年後半ごろから、熊本学園大学社会福祉学研究科花田研究室では、研究課題の一つとして取り上げることを企図し、地元労働者たちと協議を始めた。また、元組合員自身の手による組合資料整理作業も開始した。おりしも「水俣病事件史におけるチッソ労使関係と企業発展の軌跡」という研究課題で科学研究費を受けていたので、その中の課題の一つとして位置づけ、調査研究にかかる費用を捻出した⁴⁾。また、大学院生の深草雪英が修士論文の研究として取り上げ、資料の読解と労働者のヒアリングを重ねて、研究をまとめた⁵⁾こともこの研究に弾みをつけるものであった。また、2005年8月には、大学院修士課程の福祉環境学フィールドワークⅠと題された水俣地域における第1回目の臨地研修においても、チッソの労働者と労働組合をテーマの一つとして設定し、組合事務所でのヒアリングを実施していた⁶⁾。

組合は、2006年1月、組合の解散を記念する事業の一つとして、新日窒労組の軌跡を描いた写真集⁷⁾を刊行した。それを受けて、花田が、この写真集の編集に当たりまた組合資料整理に直接携わっていた元組合員のうち、最年長であった小形喜代太氏から、組合の歴史を写真集をベースに聞き取る作業を開始した。組合資料の整理・目録作成作業と並行しての聞き取りであった。

やがて、個別の聞き取りではなく、退職労働者たちからのグループ討論をしてはどうかという元組合員からの提案もあり、いわばフォーカスグループインタビュー方式で、語り合う中から事実を掘り起こす作業を企画したのである。この段階では、資料はまだ整理途上であり、直接資料に当たることは目録作成作業に混乱を来すことも考えられたので、ともかくも、議論を開始することにしたのである。これには同時に、元組合員自身の語りによる組合運動史の記録を作るというねらいも含まれていた。

そこで、花田が呼びかけてチッソ労働運動史研究会を立ち上げることにしたのである。第一回の研究会が開かれたのが2006年10月20日であった。

なお、この研究会は名称を「チッソ労働運動史研究会」としているが、この名称に関してはある退職組合員から異議が出された。というのは、労働組合の名称は「新日本窒素労働組合」であり、チッソ労働組合は1962（昭和37）年の安定賃金争議の際の組合分裂によって結

4) 花田昌宣・酒巻政章「水俣病事件史におけるチッソ労使関係と企業発展の軌跡に関する研究」（研究課題番号：16530198）、2004・2006年

5) 深草雪英『水俣労働者による安賃闘争の意義：原資料の解読と聞き取りから』熊本学園大学社会福祉学研究科修士論文、2005年1月

6) 2005年8月8日、新日本窒素労働組合事務所において、江口正安氏（新日本窒素労働組合元書記長）、徳田嘉蔵氏（新日本窒素労働組合元執行委員・元水俣市議会議員）、山下善寛氏（新日本窒素労働組合元執行委員長）からのヒアリングを実施。

7) 『創ったそして闘いぬいた』新日本窒素労働組合写真集編集委員会、2006年

成された第二組合の名称であるから、チッソ労働運動といういい方は承服し難いというものであった。私としては、新日窒労組の運動史ばかりではなく、現社名チッソという企業の歴史と労働組合運動史をたどろうという考えにたち、新日窒労組が中心となるにしても、下請けの労働組合や関連する地域の労組にも視野を広げて行くことを企図していたので、必ずしも議論がかみ合わないまま今日に至っている。今後研究会名称の変更があり得るが、本稿ではチッソ労働運動史研究会としておく。

次に、当時この研究会の課題を明確にするために研究計画を作成していたが、それをベースに若干リライトしつつ、この研究の趣旨を改めて記しておく。

チッソ労働運動史研究会の背景となるいくつかの要素

この研究会を進めるに当たり、その背景にある問題意識といくつかの課題を列記しておく。

【企業内労使関係と企業発展の軌跡】

2006（平成18）年は、水俣病原因企業チッソ株式会社が創業百年を迎え、また、水俣病事件は患者発生の公式確認から50年を迎えた年であった。ここで、改めて、この歴史の発展の中に、企業内労使関係と企業発展の軌跡を位置づけ、事件史を解明することを本研究の基調に位置づける。

【組合資料と労使関係史の記述の重要性】

新日窒労組は、1946（昭和21）年に結成された日本窒素水俣工場労働組合を前身とし、組織再編を経て1951（昭和26）年に現在の名称になった。この労組は、2005（平成17）年、最後の組合員の退職により解散を余儀なくされた。この組合の結成以来の資料（以下、新日窒旧蔵資料）が、廃棄されることなく保存されており、労使関係研究史上、極めて貴重な資料と言える。この一次資料と元組合員自身の語りによる労働運動史を、チッソ労使関係史を記述していくことが可能であり、必要である。

【60年代大争議の経験】

この労働組合は、もともとは企業内の労使協調的な組織であったが、1950年代後半、身分制撤廃闘争（工職分離の撤廃要求）を実施する過程で、対立と協調を内包した労使関係制度を形成していく。日本経済が高度成長を謳歌しようとしていた1962（昭和37）年、そしてまた日本の労使関係が安定的協調的労使関係の構築へと向かう中で、組合員数3000名を超える大工場で、会社側の「安定賃金制度」導入を巡り、日本の戦後大争議より遅れること10年、1年間近くにわたるストライキを含む大争議を展開された。多くの争議と同様、第二組合の結成・組合分裂を経験するが、新日窒労組（第一組合）は長く多数派として、労使関係の要の位置を保ち続けるという希有な経験をしている。

【研究史の弱さ】

ところが、熊本県最南端に位置するこの工場および労使関係に関しては、これまでの研究

史においては、安定賃金争議にかんする若干の記述的研究を別にすれば、ほとんど取り上げられてこなかった。

【水俣病原因企業】

また、この企業は戦後産業発展史の中で電気化学産業におけるリーディングカンパニーの一つとして重要な位置を占めつつ、その一方で有機水銀をはじめとする有害重金属を排出することにより、未曾有の公害の水俣病を引き起こした。

【水俣病患者と連帯した原因企業の労働組合】

また、新日窒労組は、総評・合化労連傘下の企業内組合でありつつ、水俣病被害者の支援の立場を明らかにし、企業犯罪を告発するという、労働組合としては実に希有な経験をしている。この点もまた労使関係研究史上、注目されたこともない。

【水俣学とチッソ研究】

以上の点をふまえて、本研究は、水俣病発生原因企業チッソの企業の特質を労使関係の面から明らかにすることによって、究極的には、負の遺産としての水俣病事件の解明に社会科学の面から貢献することを課題としている。

＜本研究の目的＞

水俣病事件は、一方で水俣という地方都市に起きた事件であるという側面、他方で国家的な公害事件であり産業政策および公害対策の課題であったという側面をもつが、いずれもチッソという企業自身が持つ特質と密接に関連している。この研究においては、労使関係の発展を企業展開との連関においてとらえることとする。とくに企業財務戦略や企業組織および戦略との関連においてとらえ直すことも射程に入れている。退職労働者、元組合員からの聞き取りもその中に位置づけられる。

＜先行研究＞

チッソ企業史研究に関しては、多くはないが、産業史的な観点から矢作正氏（浦和短大）の一連の論文⁸⁾や深井純一『水俣病の政治経済学』（勁草書房、1999年）、宮本憲一編『公害都市の再生：水俣』（筑摩書房、1977年）等があり、争議に関しては菊池昌典「チッソ労働組合と水俣病」『水俣の啓示』所収論文（筑摩書房、1983年）がある。本研究はこれらをふまえたものである。

この研究はこれまで医学や社会学あるいは法学に偏りがちであった水俣病事件史研究にも新たな光を当てることになる。なお、労使関係と企業財務の連関をふまえて企業戦略を解明していく方法は、花田が加わった、フランスに本拠を置く自動車産業研究グループ GERPISA の第一期研究プロジェクトでとられた方法であり、大きな成果を挙げた⁹⁾。

8) 矢作正氏が1999年から2002年にかけて、『浦和論叢』に掲載されている1945年からの「チッソ史」の論文。

9) M.Fressenet, R.Boyer et alii. One Best Way?: Trajectories and Industrial Models of the World's Automobile Producers, Oxford University, 1998

また、会計情報を労使争議の利害調整機能として分析する研究¹⁰⁾ もあらわれ、従来の労使関係研究に新たな貢献をもたらすものと考えられ、その方法的視点もまたわれわれの研究において活用される。

上記の点をふまえて、チッソ企業と労使関係の軌跡を明らかにする。

水俣病発生が公式確認に確認された1956（昭和31）年にいたる戦後期企業内労使関係の形成過程、水俣病暗黒の空白期といわれる1960（昭和35）年からの8年間の対立的労使関係の形成とその後、とくに1962（昭和37）－1963（昭和38）年に展開する安定賃金労働争議の特色を描き出す。水俣病裁判とその判決（1973年）の過程で水俣病被害者との共同歩調が可能になった根拠を明らかにする。その上で、水俣病裁判判決以降、被害補償による超過債務状態の企業と労使関係を検証する。

＜この研究のオリジナリティについて＞

公害発生企業の労使関係については先に記したように先行研究が少なく、またチッソに関してもきわめて少ない。この企業における労使関係の展開と新日窒労組の経験に関する研究は、研究の空白を埋めるという意味を持つばかりではなく、水俣病事件史の研究から取り出すべき教訓という面からも大きな意義を持つ。さらにこの研究の学術的な特色を付加すれば、労使関係と企業財務の両面から企業発展史を見るとともに、地域社会及び日本産業史の中に位置づけて検討するところにある。

新日窒労組は、1946（昭和21）年に結成され、地方都市における企業内労働組合としての協調的労使関係を維持していたが、1951（昭和26）年に合化労連に加盟し、1953（昭和28）年の身分制撤廃闘争（工職身分分離撤廃闘争）を経る中で、一定の緊張感を有する労働組合に成長しつつあった。ところが、チッソが電気化学工業から石油化学工業への転身をはかることを狙う中で、工場合理化と企業内安定的労使関係の構築を視野に入れて会社が1962年に提案した「安定賃金制度」導入をめぐる、大争議が発生し、1年近くに及ぶストライキを実施する。50年代争議の多くと同様に組合分裂を経験しつつも、争議敗北後も新日窒労組は多数派組合として残る。会社側による組合切り崩しを狙った差別的労務管理政策にも抗して組合組織を維持し続け、1969（昭和44）年には、水俣病患者の訴訟に企業内組合でありつつ、患者支援の立場を鮮明にし、経営側との対立を鮮明にしていく。

このような希有な経験を有する労働組合であるにもかかわらず、これまで日本の労働運動史研究においてあまり取り上げられてこなかった。

この研究においては、労働組合から提供される原資料に基づく研究が可能である。新日窒旧蔵資料は組合結成の1946年から2004（平成16）年の組合解散に至るまでのものであり、大会資料や交渉資料、ビラ、会議録、組合活動記録、執行委員のメモ類などが長期にわたって保存されている。これは組合リーダーたちが資料を大切にしてきた結果であるが、一つの単

10) 醍醐聡『労使交渉と会計情報』白桃書房、2005年

組資料がこれほどまでに残っているのは希有である。この戦後労働史・労働運動史の一級資料である新日窒労組旧蔵資料の整理・保存および活用は喫緊の課題となっていた。熊本学園大学水俣学研究センターは、退職労働者たちの協力を得て、資料目録の作成に取り組み、2009（平成21）年、第一段階の整理を終え目録を刊行する¹¹⁾とともに、2010（平成22）年1月より、現地研究センターにおいて、資料公開している。この研究はこれらの資料の活用が可能であるところに必要性和優位性がある。

さらに、組合結成時からの元組合員や争議経験者さらに退職者の会（親交会）が今なお健在で積極的に研究協力を申しでてくれており、研究者と現場の当事者による共同の研究が可能である。

また、熊本学園大学が2005（平成17）年8月水俣市内に水俣学現地研究センターを設置し、その研究設備・環境を活用できることも、本研究のフィージビリティを高める重要な条件である。

研究の進め方

本研究は、具体的には次のような手順で進められる。

【組合資料の分析と年表の作成】

熊本学園大学水俣学現地研究センターに所蔵されている新日窒労組旧蔵資料を解読し事実関係を掘り起こすとともに理論・実証の両面から分析していく。また、組合運動及び企業発展にかかる詳細年表を作成する。年表は、全国巡回資料展（2009年10月～2010年1月）に合わせて、図録に収録した簡易年表を山本尚友が作成したが、組合資料に基づく詳細な年表作成は今後の課題として残されている。

【ヒアリング】

元従業員や下請け労働者、企業関係者及び地域の関係者からのヒアリングを実施する。ヒアリングと資料分析は同時並行的になされる。ヒアリングは、二つの手法で進められる。第一は、退職労働者たちに集まってもらって進める研究会である。年代を追って時系列的にすすめて、後で見るさまざまなトピックを追ってのグループ討論も実施する。第二は、高齢化する元労働者からの個別的ヒアリングである。

【記録】

ヒアリングのデータは研究補助者がトランスクリプトし、研究記録として残して行く。組合資料と並んで貴重な資料として位置づけて行くことが肝要である。なお、研究会のメンバーで元労組員である山平勝利氏が、組合資料のうちの代議員会議事録を翻刻している。

【研究会の組織と進め方】

11) 『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』熊本学園大学水俣学研究センター、2009年3月
水俣学研究センターホームページ上からも検索できるようにしてある。
<http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/>

定例的な研究会は二ヶ月に一度、水俣市に設置された熊本学園大学水俣学現地研究センターで行う。これには、原則として、研究メンバー、研究協力者、当該元労働組合員などが参加し、成果の報告や研究進捗状況の点検、軌道修正などがはかられる。

また、水俣現地における調査作業やヒアリングは、毎月一回程度実施し、大学休暇期間中には、現地で合宿をしながら進めるものとする。

研究およびヒアリングで取り上げるテーマ群

研究テーマは、時系列的なテーマの設定および労使関係と企業発展という問題構成にもとづいて立てられる。当面、組合運動史を、時系列を追って基礎的な検討を実施し、事実関係の整理と労働運動史の記述を行う。その際の主たるポイントは以下の通り。

- (1) 50年代チッソと労働組合創成期
 - チッソの労働組合運動がいかに生成してきたのか
 - 戦争直後の組合結成過程／労働組合組織の成立と特色
 - レッドパージと組合再編過程、身分制撤廃闘争
- (2) 安賃闘争（1962年）とその後
 - 安定賃金闘争の研究そのもの
 - 安賃闘争後のチッソ労働組合
 - 不当労働行為／労働災害／南九配転などの労使交渉と裁判闘争
 - 第二組合とは何であるのか、組合分裂の意味とその後
 - 新日窒労組（第一組合）の組合員たちの軌跡
- (3) 水俣病と労働組合
 - 恥宣言（1969年患者支援決議）以前の組合と水俣病患者および恥宣言から患者支援運動への立場の転換
 - 組合員の水俣病認識
- (4) 債務超過企業と労使関係
 - 県債発行方式による原因企業への財政支援と企業存続（70年代後半以降1990年代）
- (5) 組合員減少と解散大会へ（2004年）

労使関係の形成と展開を産業史および企業史の中からとらえ返してみた時、下記のような個別論点の追究が必要となると予測される。資料分析や時系列的な問題を追跡するヒアリングにおいても意識して実施し、意図的にトピックスを設定する必要がある。

- (1) 化学産業とチッソ企業史
 - 水俣病発生企業としてのチッソ
 - 企業戦略
 - 国策企業としてのチッソ（戦後復興期、高度成長期、70年代半ば以降）

同業他社：産業史的視点から

(2) チッソ企業財務と会社組織（および労使関係）

労使交渉および企業発展における会計情報

労使協議会及び団体交渉の再定置

(3) 地域社会とチッソ

地域経済社会におけるチッソと労働組合

地域労働組合運動とチッソ

チッソと子会社

(4) 企業内組合としての労働組合と労働組織

解散に至る過程の労働組合

第二組合の存在とその意味

(5) チッソ労使関係におけるジェンダー

化学産業としては珍しく女性労働者が多数在籍し婦人部が大きな意味を持つ。また争議時においては「主婦の会」の果たした役割が極めて大きい。

この研究の実施体制

【研究の環境整備】

熊本学園大学には、水俣学研究センターが設置されており、資料室、作業室、などを研究スペースとして利用する。また、本研究にかかる書籍類や水俣病事件史にかかる資料類の収集も進んでいる。水俣市内に開設されている水俣学現地研究センターを、現地における研究拠点として活用する。またすべての新日窒労組旧蔵資料全体が所蔵され、2009（平成21）年3月には簿冊単位で目録作成は完成し、研究に活用できる状態になっている。本学には「水俣学」研究プロジェクトが立ち上がっており、必要に応じて専門的研究者の助言を受けることが出来る。

【成果の発信】

研究成果に関しては、学会等での研究報告とともに、地元還元をはかるべく、成果の刊行、現地での公開シンポのおよび資料展開催を計画していた。これに関しては2009年10月から2010（平成22）年1月にかけて、法政大学、大阪人権博物館、熊本学園大学本学キャンパス、および水俣市内の四ヶ所で資料展およびシンポジウムを開催してきたところである。また、先に述べたように資料目録も公開した。今後、研究の進展状況も、学会や専門研究誌等での研究発表とともに同じくホームページで随時公開することとしている。

（資料：研究会立ち上げの呼びかけ文）

なお、資料として、2006（平成18）年10月にチッソ労働運動研究会を立ち上げた際の呼びかけ文を掲載しておく。

水俣病事件とチッソ労働運動史研究会の立ち上げについて

文責 花田昌宣

2006/10/18

はじめに

現在、私（花田）と酒巻政章先生とで日本学術振興会科学研究費を受け、「水俣病事件史におけるチッソ労使関係と企業発展の軌跡」というテーマで研究しております（2006年度で終了）。

私が社会福祉学部長・大学院研究科長の職にあり、また水俣学研究センター全体の運営・研究調査におわれ、酒巻先生も教学部長職に有り、ともに忙しさに追われて、遅々としてしか進んでいません。

やり残していることが沢山あり、継続して研究を進めようと考えています。

現在、水俣学現地研究センターに組合資料を受入れ、整理作業をしています。今年度中には、山本尚友先生の指揮の下、おおまかですがカード化が終わり使えるようにしたいと思っています。

そこで、この組合資料をベースにし、研究者も増強して、（最終的には）チッソ組合運動史の編纂につながるような研究をしたいと考えています。

（中略）

研究会の課題と目標

- ・チッソ組合資料を活用し、チッソ労働組合運動史をまとめたい。

その作業のなかで、明らかにしていくべき論点は数多くあるものとする。

- ・本研究は、水俣病発生原因企業チッソの企業の特徴を労使関係の面から明らかにすることによって、究極的には、負の遺産としての水俣病事件の解明に社会科学から貢献することを課題としている。
- ・水俣病事件は一方で水俣という地方都市に起きた事件であるという側面、他方で国家的な公害事件であり産業政策、公害対策の課題であったという側面をもつが、いずれもチッソという企業自身が持つ特質と密接に関連している。本研究においては、労使関係の発展を企業展開との連関においてとらえることとする。とくに企業財務戦略や企業組織および戦略との連関においてとらえ直す。
- ・それらを通してチッソ企業と労使関係の軌跡を明らかにする

水俣病公式確認たる1956年にいたる戦後期企業内労使関係の形成過程、水俣病暗黒の空

白期といわれる60年からの8年間の対立的労使関係の形成、とくに1962-3年に展開する安定賃金労働争議の特色を描き出す。水俣病裁判とその判決（1973年）の過程で水俣病被害者との共同歩調が可能になった根拠を明らかにする。そして水俣病裁判判決以降、被害補償による超過債務状態の企業と労使関係を検証する。

この研究（会）の特色

- ・ 組合資料が残っていること
- ・ 退職労働者達を中心に語り手が多くいること
- ・ 水俣学研究センターという研究調査の拠点があること

研究会の組織のあり方

水俣学研究センターをベースに研究を進めていく。

研究会事務局は、水俣学研究センター研究助手やアルバイトが担うものとする。大学の研究者達とチッソの退職労働者達の共同の研究会として進めていきたい。

研究の進め方は、専門家と非専門家の壁を越えて、共同で学ぶものが出来れば素晴らしいと考えて行く。

研究メンバーについて

花田昌宣 熊本学園大学社会福祉学部・水俣学研究センター（社会政策学・水俣学）

酒巻政章 熊本学園大学商学部（会計学）

福原宏幸 大阪市立大学経済学部（労働経済学）

富田義典 佐賀大学経済学部（労働経済学）

磯谷明德 九州大学経済学研究院（労働経済学）

山本尚友 熊本学園大学社会福祉学部（部落解放論）資料整理担当

その他、募集する

チッソ退職労働者

進め方

月に一回あるいは二ヶ月に一回研究会を開き、勉強会や研究報告、討論会を行う。必要に応じて専門家らを招聘する。資料整理は継続するとともに、資料分析に着手する。労働者ヒアリングを系統的に行う。